

テーマ 「遣わされて使命を果たす」

1. 派遣される(聖書から)

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:18~20)

イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように、父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから彼ら息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(ヨハネ 20:20~23)

「あなたがたに聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒書 1:8)

2. 福音宣教者とは?

カルロ・マリア・マルティーニ『宣教者をそだてるイエス』より 今道瑤子訳 女子パウロ会 1988年 表現を変えています

・「ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。」(エフェソ 4:11) イエスの体(教会)を建てるのを助けるパウロの言う5つの賜物。

・もちろん、賜物は5つに限定はされません。

・「使徒」とは、共同体の最初の土台を置き、それを支える人。

・「預言者」は、共同体にとって今、神の計画は何かを解釈する人。

★「福音宣教者」は、ケリグマ、良き知らせを告げる人、神の救いを望む新しい信徒を共同体の仲

間に加える人。(受堅者もその一人になります)

・「牧者」は、形成された群れを導く人。

・「教師」はカテケージスをもって神学や教えを深める人。

・しっかりとした土台のある共同体 (イグナチオ教会の目指すところ) とは・・・これら5つのカ

リスマがバランス良く発展させる共同体です。

★新約聖書が示しているように「福音宣教者」の務めは、司祭・シスターではなく信徒によって

果たされます。

★「福音宣教」には、待つよりも出掛ける活動、出向く活動が大切。そのために必要な能力

1. 他者の心に入って行く能力
2. その人が必要としていることを察する能力
3. 目の前の人の信仰の恵みの芽を発見しながら、神に向かう歩みを助ける能力

司祭は、ミサをはじめとする秘跡を行います。社会への福音宣教は、信徒の果たす役割の方が司祭シスターよりはるかに大きいものです。信徒の方が、社会の中に入り込めます。それぞれが持っているタレント（人を楽しませる・助ける・和ませる・・・）を生かして、秘跡以外の分野で社会に福音を告げ知らせましょう。

→いきなりうまくはいかないでしょう。創意工夫を凝らしながら続けましょう！

3. 堅信後の私の場合

- ・大学3年の時に木曜会で受洗（アシジの聖フランシスコの平和を求める祈りを覚える）
- ・大学4年生の時（1987年）にイグナチオ教会で受堅してから配属先の名古屋へ。
- ・配属当初は6時半の朝ミサに出てから出勤したが続かない。日曜日は仕事でミサには行けない。
- ・ミサに与るのもクリスマスと復活祭だけ。信仰の火は弱くなっていった。
- ・就職4年目。休日にボランティアをしようと思いつく。南山教会の「レジオ・マリエ 祈りと奉仕の集い」のポスターを見つける。→筋ジストロフィーの方の入浴の介助を始める。
- ・ボランティアは教会外の人と関わりながら、自分の信仰を実践するチャンス。
- ・レジオの集いでロザリオ、聖霊の導きを願う祈りを唱える。
- ・安全な運転に気を配りながらロザリオを唱えるようになる。
- ・レジオの指導司祭の「恵みは過去に縛られない」という言葉で信仰に新たな火がつく。 「信仰の恵みは、こんなもの？」と気持ちが冷めてしまっていたが「次の恵み」に期待するようになる。

人生の目標 1

ロザリオの祈り（よろこびの奥義）

第二の奥義

マリアは大天使から、親戚のエリザベトが神の恵みによって子を宿したことを知り、ユダの山地にエリザベトを訪問する。

この1連をささげて、自分のことよりも、いつもよろこんで他人に奉仕する愛の心が深まることができるように聖母マリアの取り次ぎを求めましょう。

マリア様の心でボランティアをする→会社でも、生き方でも、と発展していく。

人生の目標 2

「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」（使徒書 20：35 ミレトでのパウロの演説）

受けるより与える方が素晴らしい喜びにあふれる。なぜなら、私たちは、他の人を喜ばせるときに自分が創られた意味を味わうからです。

人を喜ばせるにはどうしたらいいか？ 特別なタレントはなくても創意工夫・試行錯誤を続ける。

カナの婚宴のマリア様の態度から学ぶ（ヨハネ 2：1～11）

カルロ・マリア・マルティーニ『人びとと共に歩むマリア』より 吉向キエ訳 女子パウロ会 1993年 表現を変えています。

プラスアルファをもたらすマリア様（自分のことだけで精一杯になりがちな社会に潤いを）

1. 全体を見る

マリア様にも奉仕の役割があったでしょうが、全体を見て足りないところを見つけられます。

2. 深入りする

ぶどう酒がなくなること気づいても、踏み込むと厄介なことになります。だから、みて見ぬふりをしがち。でも、マリア様は深入りされます。

3. 動じない

息子イエスにぶどう酒がなくなりかけていることを伝えても、はじめはぶっきらぼうな態度を取られます。それでもマリア様は、イエスが何かしてくれるに違いない、と信じて動揺しません。

今の自分の状態はどうなのか？ マリア様と照らし合わせるようになりました。

・営業の仕事は水曜日がお休みのため、ミサに与ることはあまりありませんでしたが、信仰の恵みをたくさんいただきました。

・身障者と一緒に湯船に浸かっている時には健常者とのバリアがなくなる体験をしました。

・業績のプレッシャーを受ける営業と無償の奉仕を交互にする中で司祭への召し出しに繋がりました。

・レジオの集会では、ロザリオ、活動報告、霊的読書が毎週行われ、キリスト者共同体の良さを感じました。

使徒の時代にキリスト者は周りから“好意”を寄せられていました。

→今の自分たちは周りから好意を寄せられているのでしょうか？

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心をつ一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

(使徒書 2 : 42~47)

3. 働く姿でも宣教したパウロ (私の堅信名 パウロ)

R.F.ホック『天幕づくりパウロ—その伝道の社会的考察』より 笠原義久訳 1990年 日本基督教団出版社 (表現

を変えています。)

パウロは、使徒たちの中でも特別な存在です。ペトロたちのように生前のイエス様を知りません。他の使徒たちが共同体の支援で生活していたのに対して、パウロは生活費を自分で稼いでいました。雄弁な姿だけでなく、地道に働く姿でも宣教をしていました。テント職人として苦勞しながら宣教したパウロから、私たちが職場で宣教するヒントを得ましょう。

○聖書箇所から

宣教旅行中、パウロが天幕づくりによって自ら生計を立てていたことが聖書箇所からわかります。どれも苦勞して働きながら宣教したパウロを想像させます。

「パウロはこの二人（アキラとプリスキラ）を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。」（使徒 18:2～3）

「兄弟たち、私たちの苦勞と骨折りを覚えているでしょう。私たちは誰にも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなた方に宣べ伝えたのでした。」（1 テサ 2:9）

「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存知のように、わたしはこの手で、わたし自身のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなた方もこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるより与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」（使徒 20:33～34）

「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています」(1 コリ 4:11~13)

「パウロは、自費で借りた家に丸2年間住み・・・」(使徒書 28:30)の箇所から、人生の終わりに近いローマでの拘留中でさえ、パウロは働いていたことが想像できます。

○どんな働き方だったか？

皮細工師の仕事は、自由な身分の仕事でしたが、教育のない者でも就け、体に良くない仕事と見なされていました。宣教先でパウロは、奴隷のように仕事台に身をかがめ、奴隷たちと並んで作業していました。実際の働き振りについては、「夜も昼も働きながら・・・」(1テサ 2:9)とあります。

日の出前から働き始め、日中殆んど働き続けていました。当時の文献から通常の職人が、日中だけの労働時間だったことが推測できます。パウロは普通しない長時間労働をしていたのでしょ。待遇については、「飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。」(1 コリ 4:11~13)の聖書箇所にあるように、経済的に自立はしても、生活は厳しかったことが想像できます。

○働くパウロへの評価

聖書には、働くパウロが侮辱され、尊ばれなかったことが述べられています。「あなた方は尊敬されているが、私たちは侮辱されている。」(1 コリ 4:10~12)

その理由には、職業によるものがあつたと考えられます。なぜなら、当時、財産と地位があり、選択の自由がある者(自由人)ならば、パウロのような手仕事を選択しなかったからです。自由人に相応しい学芸の一つ(修辞学、哲学、政治学など)を教えて生活の足しにしたでしょう。だから、パウロがいくら骨身を惜しまず働いても、知識人からはそのような職種に就いていること自体で蔑まれていました。社会的に下層階級「帝政ローマ時代の職人階級」に位置づけられました。ある面、他の使徒たちと同様に共同体から経済的支援を受けていた方が評価は高かったかもしれません。けれども逆に、都市の純朴な貧困階級が喜んでパウロの話に耳を傾けます。なぜなら、働く苦勞がわかっていただけからです。パウロの身近な話が共感を生み、話を聞く姿勢を作っていました。

○仕事と宣教の関係

「兄弟たち、私たちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、誰にも負担をかけまいとして、夜となく昼となく働きながら、神の福音をあなた方に宣べ伝えたのでした」(1 テサ 2:9)

共に労苦した仕事場がもう1つのパウロの宣教の場でした。働く姿で宣教していました。身につけていたテント職人としての技術がパウロ独自の宣教スタイルを生みました。

パウロの仕事ぶりは当時の人々だけではなく、特別な才能がなく働く人たちにも共感を与えます。

私たちの日々の労働によって、神の計画が実現されることを教えてください。

キリスト教的 労働理解 「神の創造のわざへの参与」

○パウロの自由さ

パウロは、異邦人の宣教のリーダーとして尊敬されることもあれば、職人として貧しく暮らすこともできました。その自由さに倣いたいものです。

「私は、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。」(フィリピ 4:12)

○まとめ

私たちの多くは、キリスト教とは関係のない職場で働いています。そのような場所で宣教するのが難しいと感じたり、諦めの気持ちがあるかもしれません。直接、信仰に関わる内容が言い出しにくいからです。けれども、そんな私たちにテント職人をしながら、福音を伝えたパウロは勇気を与えてくれます。作業仲間と同じ条件で、黙々と働く姿で「この人はどこか違う。何が源なんだろう？」と奴隷たちは関心を持ったでしょう。

イエズス会に入会する前にわたしはプレハブ住宅の営業をしていました。あるお客様から「柴田さんの働き方に、宗教性を感じる。他の営業の方とは違っていました」と言われたことがあります。そう感じられた理由が何なのか、よくわかりませんが嬉しく感じました。周りの人に、そう感じてもらうチャンスを私たち一人一人に与えられています。働く姿で宣教したパウロから勇気とヒントをもらいましょう。

○働くスタンス

- ・「人様に喜んでもらえない仕事なら最初からするな」と教えてくれた父。
- ・お客様に喜んでもらえる仕事を！
- ・同僚にはカトリック信者と公言していました。
- ・社内からも次第に「自分が家を建てるなら柴田さんに営業してもらいたい」と言われるように。
- ・「人の役に立つためには何をしたらいいか？」「人に喜んでもらえるためにはどうしたらいいか？」
- 「職場で福音を宣教するにはどうしたらいいか？」 試行錯誤が自分を成長させてくれました。

6. まとめ 受堅者の使命

- ・宣教の場は社会：「職場」「家庭」・・・信徒にしかできないミッションです。
 - ・けれども、職場にカトリック信者がいることは少ない。一人で宣教するのは、勇気がいります。
 - ・聖霊の力、知恵と勇気をもらいながら、毎日宣教の場に乗り込みましょう。（創意工夫が大切）
 - ・信徒の挑戦を支えるのが聖霊の7つの賜物“上智、聡明、賢慮、勇気、知識、孝愛、主への畏敬”と教会（仲間・共同体）です。
 - ・受堅者には聖書の世界を現実に立ち上げる使命が与えられます。
 - ・受洗がゴールではなく、堅信が信仰の恵みのピークでもありません。
 - ・この先、もっともっと・・・ 私は1987年に堅信を受けました。それから34年・・・
- 皆さんの5年後、10年後、30年後？ 信仰の恵みをたくさんいただけるように！
- ・堅信はそのスタート！

前回、6月16日(水) 18:45~20:15と6月20日(日) 11:15~12:45(場所は2回ともヨセフホール)とお知らせしましたが、6月5日(土)18時のミサの時間からゆるしの秘跡が再開されます。16日と20日以外の主日のミサの時間にも分散して秘跡を受けられることをお勧めします。

第4回の予習 「ゆるしの秘跡」の準備

対象はこれまでにゆるしの秘跡を受けてない方ですが以下の文をご覧になって授かりたい方はどうぞ！

ゆるし秘跡の改善（長い告解 3つの告白）

カルロ・マリア・マルティニー『宣教者をそだてるイエス』今道瑤子訳 女子パウロ会 1988年（表現を変えています）

教会は「罪」と「罰」をセットで考えるのではなく「罪」と「恵み」をセットで考えます。ゆるしの秘跡は「罪の状態」「何かに囚われている状態」から「恵みの状態」に戻るためのものです。このゆるしの秘跡、昔からの受け方に問題も感じてなくて、ゆるしが深く入っている人もいます。でも、うまくいかない、物足りなさを感じている人もいます。問題は2つ考えられます。①形式的になって効果を感じない ②秘跡をうけた後、生活が変わらない。この2点があります。

ある聖書学者は、2つの問題を解決するために「長い告解にしたらどうか？」と提案しています。長い告解と言うのは、告解を3つ「感謝の告白」「生活の告白」「信仰の告白」に分ける仕方です。

感謝の告白

ゆるしの秘跡の問題点は、気が重くなることです。「自分のどこがまずかったか？」「何を怠ってしまったのか？」と考え始めると、気がめいてきます。「これだけ頑張ってるのに、神様はさらに要求されるのか？」と身構えてしまう人もいるかもしれません。そうではなくて、ゆるしの秘跡の最初は、「神様への賛美・感謝」から始めます。「私の人生に神様がどう関わって下さったか？」

最近、神様がどう私を助けたり励ましたりして下さったのか、を振り返ります。感謝も賛美も全くないという方は、特別苦しい状態か、神様からの恩を何も感じなくなっているので神父さんに相談して下さい。でも、多くの方は感謝することを見つけられると思うので、ゆるしの秘跡を「賛美と感謝の告白」から始めて見て下さい。

生活の告白

続いては「生活の告白」です。日頃の生活の中で重荷になっていること「自分はダメだ」とか縛っているくびきを話します。心に重くのしかかっていることに、自分の弱さや至らなさも絡んでいたらそのことをありのままに打ち明けましょう。私たちは、くびきに縛られて「恵み」から離れて「罪の状態」に陥ってしまいます。神様は、ゆるしの秘跡を通して私たちに自由にしようとされていますが、この苦しい部分がそのままだとゆるしの秘跡を受けても生活は変わりません。「罪」に陥り「恵み」から離れるには、人によって大体パターンがあります。たとえば、「人と同じことをしてないとダメ」とか「完璧でないとダメ」とか、このようなくびきに知らず知らず縛られていきます。無気力になって前に進めなくなります。そこから脱するには「妨げ」と「助け」を見分けることが鍵になります。「妨げ」は「やらないとダメだという使命感」かもしれません。あるいは「自己はいくら頑張ってもこの程度」という投げやりな気持ちかもしれません。では、反対の「助け」があるのでしょうか？ 幼稚園で働く私にとっての「助け」、前に進ませしてくれるのは、子どもたちの柔らかくて小さな手です。「一緒に遊ぼう！」「一緒にご飯食べよう！」と誘ってくれる小さな手です。その感触を思い出すと「自分はダメだとか」という縛りから解かれて「もう少しやってみようか！」という気持ちになります。「助け」をよく見て「妨げ」を脇にやることです。

信仰の告白

最後は「信仰の告白」です。「神様、私はこんなに弱いですが、どうか受け入れて下さい。あなたに最後までついていきたいのです。どうか私を自由にして下さい」と神様に願います。

ゆるしの秘跡のモデルは、放蕩息子のたとえ話にあると言われています。家で待つお父さんは、まだ遠くにいる息子を見つけてゆるして、祝宴までしました。同じように神様は、初めから私たちをゆるすと決めていらっしゃる。神様は、私たちが心の重荷から解かれて自由になることを願っています。ゆるしの秘跡を授ける司祭も、みなさんが神様の励まし、あわれみ深さを感じ直して、生活が変わることを願っています。

参考文献

カルロ・ MARIA・マルティーニ『人びとと共に歩むマリア』吉向キエ訳 女子パウロ会 1993年

カルロ・ MARIA・マルティーニ『宣教者をそだてるイエス』今道瑤子訳 女子パウロ会 1988年

カルロ・ MARIA・マルティーニ『パウロの信仰告白』今道瑤子訳 女子パウロ会 1990年

R.F.ホック『天幕づくりパウローその伝道の社会的考察』笠原義久訳 1990年 日本基督教団出版

社